

## 水谷修 「センター設立の意義の再確認を」

Inter-University Center for Japanese Language Studies in Tokyo [米加十二大学連合日本研究センター]が東京に設定された目的はひとつではないが、最も強調された趣旨は、アメリカ、カナダの日本研究者の卵に徹底的に現代日本語の能力を身につけさせる必要がある、ということであった。

第一の世代の日本研究者は、ライシャワーに代表されるように、日本に生まれ育ち、日本語能力は十分に備えていた。第二の世代といわれたサイデンステッカーやドナルドキーンなどの世代の人たちも優れた日本語能力を身につけていた。その理由は、第二次大戦時の軍隊での厳しい日本語教育を受けたことにはじまる努力の積み重ねによるものであった。当時これらの世代に続く第三の世代の研究者がどのようにして日本語能力を身につけていくかが大きな課題となっていた。東京の日本研究センターはこの課題を解決するための拠点として用意されたのである。

日本語能力をしっかりと身につけた日本研究者の育成に、センターは見事な成果を挙げたと言ってよい。現在アメリカだけではなく世界の日本関係の研究者の中に占めるセンター卒業生の多さはこの事実を明らかに示している。

設立後30数年を経た現在もその重要性は少しも変わっていない。日本語能力を身に備えた若い日本研究者も予定されなかったほど多くなった。日本語の学習や日本研究のための機会も30年前に比べれば比較にならぬほど増えた。だからセンターの役割が小さくなったと考える人がいるとしたらそれは誤りである。

レベルの高い日本研究者を確保することは関係者の数が増えれば増えるほど大切になる。優れた日本研究者、日本語に深い洞察力と高度な運用能力を持った日本研究者の育成の価値をもう一度見つめ直すべき大切な時期に来ていると思う。

(元センター副所長、前日本語教育学会会長、名古屋外国語大学学長)